令和７年度第１回幕別町総合教育会議議事録

１　開催日時　　令和７年７月25日（金）16時00分～17時30分

２　開催場所　　忠類ナウマン象記念館研修室

３　出席委員（６名）

幕別町長		飯田　晴義
幕別町教育委員会教育長		笹原　敏文
	教育委員	小尾　一彦
	教育委員	岩谷　史人
	教育委員	國安　環
	教育委員	東　みどり

４　日程

(1)　開会挨拶

(2)　協議事項

①　忠類ナウマン象を活用した地域づくりの現状と課題

５　事務局出席者

幕別町企画総務部長		山端　広和
〃	政策推進課長	宇野　和哉
〃	政策推進課副主幹	中田　周呼
幕別町教育委員会教育部長		石田　晋一
〃	学校教育課長	酒井　貴範
〃	生涯学習課長	谷口　英将
〃	忠類ナウマン象記念館長	添田　雄二

６　傍聴者

１人

７　議事録

（政策推進課長）

定刻になりましたので、ただいまから令和７年度第１回幕別町総合教育会議を開催いたします。

はじめに町長よりご挨拶を申し上げます。

（町長）
　皆さんこんにちは。本当に暑い中、こうして会議に出席いただきましてありがとうございます。
　今年の暑さは、一昨年の暑さを上回るぐらいの推移かなと思っています。既に 36 度台が今日で５日目ですね。昨日は 38.8 度ということで、猛暑日を６日間記録しているということで、農作物の生育にも影響していますし、恐らく乳量もこれからだんだん落ちてくると思うと、本当に農家の方々にご負担をおかけしていると思っているところです。
　今日の議題は、忠類ナウマン象を活用した地域づくりの現状と課題ということであります。実は先週ですね、東京都中央区の区長とお会いしまして、（第２回ナウマンゾウサミットについて）細部が決まってないところがありましたので、意見交換をさせていただき、ほぼ方向性が固まりました。
　実はこの第２回サミットというのは、今年の１月ですね、中央区で第１回のサミットを開催しましたが、その際に、ぜひ、２回目は幕別町忠類でやって欲しいとお願いをして、実現したということです。全員が出席できるわけではなく、リモートでの出席者もいますが、それでも、かなりの方が忠類に来て、忠類の取組を学んでいただける、あるいは、ある程度の観光も含めて、経済効果も見込めるのかなという気がしております。
　今日は、館長からサミットの内容について説明をしていただいて、皆さん方からご意見もいただき、よりすばらしいサミットにしてまいりたいというふうに思っておりますので、よろしくお願い申し上げまして、冒頭のご挨拶とさせていただきます。

（政策推進課長）
　それでは協議に入ります前に、配付資料の確認をさせていただきます。
　お手元に次第とホチキス留めの資料１「忠類ナウマン象を活用した地域づくりの現状と課題」以上２点をお配りしております。もし、資料がなかったらお知らせください。よろしいでしょうか。
　本日の協議事項でございますが、忠類ナウマン象を活用した地域づくりの現状と課題の１点であります。
　ここからの進行につきましては、幕別町総合教育会議の運営に関する要綱第４条に基づき、町長にお願いいたします。

（町長）
　それでは早速、協議に入らせていただきたいと思います。
　まず、忠類ナウマン象を活用した地域づくりの現状と課題につきまして、添田館長から説明をお願いします。

（忠類ナウマン象記念館長）

それでは早速始めさせていただきます。

今日の発表ですけれども、皆さんのお手元に代表的なスライドはお渡ししておりますが、まず、化石発見以降の沿革をご説明しまして、その後に、近年、当館を中心に行っております地域連携事業を紹介した後、ナウマンゾウサミットへの取組をご説明いたします。このナウマンゾウサミットは、地域連携事業、地域づくりの１つとして位置づけることとしておりますので、今日は組み込ませていただいています。最後に、今後の課題を説明して終わりにしたいと思います。

この発表が終わりましたら、１度質疑応答を受けまして、その後、展示室にて展示の詳細をご説明したいと思っております。

まず、沿革になりますけれども、今日の発表に全体的に絡んできますので、スライドを１つ作らせていただきました。

1969 年に臼歯がまず発見されまして、1970 年に大発掘が行われたというのが忠類ナウマン象ですけれども、２年にわたって発掘が行われて、かつ、この化石の特徴としまして、初年度は、頭と左半身。次年度は、両腰と右半身が見つかったというのが、実は特筆すべき点でございます。

後程展示室でご説明しますけれども、当時の研究成果としまして、忠類ナウマン象は若い個体であろうと。それから、沼に足を取られて死亡したというのが研究成果でございまして、これがずっと定説化していったという背景がございます。

そして、1988 年に当館がオープンいたしました。私が入庁して思ったんですけれども、1969 年に発見されてから記念館が設立するまで約 19 年ですね。20 年近く経っていたにもかかわらず設立したということ。それから、この前年に国鉄広尾線が廃線になっています。そういう交通の便が悪くなっているにもかかわらず設立しておりますので、やはり、この地域にとっても十勝全体にとっても、忠類ナウマン象が重要な郷土の宝であったのだろうと実感しております。

それから、2008 年ですね。ここがとても重要な年になりまして、北海道発の足跡化石が発見されます。これは、忠類ナウマン象が見つかった発掘現場で調査を行った時ですが、実はこの 2008 年の調査は、2007 年とセットで行った調査でして、発掘現場における総合的な調査をいろんな研究者が集まって、私も北海道博物館のメンバーとして参加しましたけれども、この調査の時に足跡化石を見つけております。

これが実際に見つけた足跡化石の１つでございまして、ちなみにこれは、岩谷さんの手でございます。貴重な発掘の資料になっております。

この 2007 年ですね、２年セットで調査を行っていますが、その前年に幕別町と忠類村が合併をされておりますね。ですから、何となくこの足跡化石の発見が後々ずっと影響しますので、調査に入る前年に、要するに、合併された次の年に、こういう調査があって、大きな発見が行われたというのも、何か運命的なものを感じているところでございます。

この足跡化石の発掘ですけれども、北海道では、ゾウ化石が大体20数例見つかっていまして、場所で言いますと約10か所ですけれども、この中でゾウ化石の発掘を毎年行っているのは忠類だけになります。これは、他の場所の化石は、歯だけであったり、かつ、どこで見つかったかというのが実はどこも限定できないんですね。見つかった場所が開発で失われていたり海底であったりしますので、掘りたくても掘れない。そういう中で、忠類だけは掘ることができますので、これは、幕別町の地域づくり、まちづくりを行っていく上ではとても重要な要素になると思っております。

この年に、もう１つ大きなことがございまして、この総合調査と並行して、化石の骨の調査も行っていましたが、忠類ナウマン象が実は老齢のおじいちゃんの象であるということ、それから、実は1970年に歯が1つ見つかっているんですが、これがナウマン象ではなくマンモスであるという発表がされました。

この２年の調査研究を踏まえて、2010 年には、忠類ナウマン象が洪水で流されて埋まったんだということも、高橋啓一博士らによって発表されています。ですから、ここで、定説が覆ったといいますか、新しい説が出ました。

2019年に、発見50周年を迎えたのをきっかけに、この足跡化石の発掘を再開することになります。この年から、連続で発掘していることが、昨年のこの忠類ナウマン象の頭骨片を見つけることになっていきますが、昨年ですね、初めてリニューアルを行いまして、これらの新しい研究成果を反映した展示室に変えました。

もう１つ、郷土展示室を新設したんですけれども、これは、私が入庁してからずっと気になっていたのは、ゆり根ですね。忠類は、ゆり根とナウマン象の二大特産を有する地域ですので、この展示コーナーをどうしても作りたかったというのがあります。

つまり、ここに来ると、二大特産のことを知れるという、地域の中心的な生涯学習施設にしたくて郷土展示室を新設して、それを利用した事業も行っております。おかげさまで、リニューアル後の入館者として前年度比で約2700人の増加となりました。

昨年発掘し、新しい発見を踏まえて、今年は第２回の全国ナウマンゾウサミットが開催されるという流れの中で、地域連携事業を行ってきております。

この後、具体的な事例を発表していきますけれども、博物館における地域づくりの役割というのも触れておきたいと思います。

地域づくりというのは、色々な立場の方が色々な立場の方法で地域づくりをされておりますけれども、その中に博物館も１つとして入ることで、様々な効果が生まれ、博物館も地域づくりにとっては重要な施設であるということをご説明したいと思います。

もともと、博物館学芸員の業務というのはこの３つが基本でございました。これは私が、博物館学芸員の資格を取得する際に、教科書にはこれしか書いてなかったというぐらいの代表的な仕事ですけれども、調査・研究は、私の場合はナウマン象の調査研究をして、見つけた化石を保存し、その研究成果を展示したり講演したりするという、これが学芸員の基本業務だったんですけれども、2000 年代に入りまして、この基本業務だけではなく

て、こうした課題が指摘されるようになります。つまり、地域活性化への貢献、地域との協働で創出するマネジメント能力、これが求められてきているということが言われ始めます。

この背景には、博物館の指定管理化でしたり、学芸員が退職後に補充されなくなった博物館が、そもそも職員が１人もいなくなって、必要な時だけ開けるようになった博物館が出てきたという背景があります。つまり、その地域にはそれほど必要とされなくなってきた博物館が出てきたというのがあって、こういうことが言われ始めます。

これは、とても重要なことでして、博物館にとっては、存続を考える上でも、実は地域づくりや生涯学習、社会教育にはとても重要な施設だというのが、ここで改めて、実績を見せていかなければならない時期を迎えていました。また、法律的にもそれが義務化されまして、2022 年の博物館法の改正の時に、博物館というのは、他の博物館ですとか、地域の皆様と連携協力することによるその文化観光など、地域活性化への貢献が努力義務化されたということになります。

ですから、今、博物館に勤めている方とか、博物館の関係者は基本的義務プラス、地域との協働による生涯学習、社会教育事業を展開することも業務になっております。これによって、これまで地域の方々が行ってきた地域づくりとの相乗効果が生まれたり、もしくは、相互に補完し合うことで、何倍もの効果が生まれるというのが、博物館の地域づくりの役割ですね。こうすることによって、地域に必要となる博物館へとなっていくだろうと考えております。

ですから、これからの博物館としましては、地域の人材育成や教育基本計画を考える上で、欠かせない存在にしていかなければいけない。それを維持していかなければならないというのが、博物館の現状となっております。

ここから、私が入庁してから行っているナウマン象を題材とした地域づくり事例を報告します。

まず、発掘調査の活用です。先程申し上げましたように、北海道で毎年、しっかり予算をつけて発掘調査を行っているのは本町だけですので、これはまさに地域の個性でございますから、地域づくりに活用していこうということでございます。

具体的には、これは、道の駅忠類との連携ですけれども、さらにですね、地域の銘菓でありましたナウマン饅頭と連携させることで、ちょっと大げさになりますけれども、地域経済の活性化といいますか、観光にも結びつけようという作戦でございました。

これは、６個パックに発掘期間だけ限定の包装紙を作りまして、裏面には、発掘の解説ですとかナウマン象の特徴が書かれたものをつけて、いわゆる、付加価値を付けて、この期間だけ販売するという作戦でした。道の駅にもポスターを貼って販売することで、発掘調査自体の宣伝にもしていたということになります。

これは、実はもともと長野県に私が発掘調査に行ったときに、向こうがこういうことを先にやっていたんですね。こういうことは、ぜひ、本町でも取り入れるべきだと思いまし

て、同じことをしたんですけれども、長野県と違うところは、道の駅店長の発案で、発掘現場と道の駅の人の行き来も作った方が良いだろうということで、ここに小袋を入れることで、発掘現場に行くと 12 万年前の小石がもらえますよというのをやってはどうかというご提案を地域の方からいただきまして、その提案を採用することにしました。

これが、長野県とは違う本町のオリジナルですけども、実際に何組か道の駅で買いましたといって小袋を持ってきてくださったお客様もいました。

次に、ホテルアルコとの連携の事例ですけれども、これは、昨年 54 年ぶりに頭骨片を発見した時に、ぜひ、地域でも盛り上げて欲しいということで、道の駅とアルコに何か特別な企画をしてくれませんかとお願いをしましたら、早速やってくれた事例でございます。

これは道の駅ですね。この頭骨片を期間限定で展示したんですけれども、その期間中に合わせて、ナウマン象記念館の半券を持ってくるとコーヒーが無料になったり、ナウマン象の名前に関するすべての商品が割引の対象となるなどの特典がありました。

ホテルアルコに関しましては、毎年 50 個しか販売していない福袋を 54 年ぶりに発見したので、54 個にしていただいたり、展示期間中の連休に入浴が半額になるですとか、ドリンクバーが無料になるなど、こういった地域の取組として発掘調査を活用してくださいました。これは、地域の方が自分で考えてくださった内容ですので、こういった取組は、今後も、続けていきたいと思っております。

次に、忠類２大特産のコラボということで、ゆり根ですね。リニューアルした時にゆり根の展示コーナーを作ったんですけれども、その後も、何かしらでゆり根をナウマン象に絡めてＰＲしていきたいと思っていたところでございました。

そうしていたところに、この特産品の郷土展示室コーナーにも展示したんですけれども、ちょうどゆり根カレーが販売されるタイミングでございまして、この裏のパッケージに解説があるんですけれども、この監修、ナウマン象の解説をお願いしたいと道の駅の店長から依頼がありまして、この商品を知ることになりました。

これを見た時に、すぐに私はこれこそが適していると感じました。つまり、ナウマン象は死後に洪水の影響で流されたということがわかったという新しい説として、リニューアルの展示にも表現したんですけれども、それを子供たち、特に親子に何か体験をしながら、理解してもらいたいということで、この純白ゆり根カレーを使いまして、ゆり根を河原で横たわって死んでいる忠類ナウマン象に見立て、カレールーを洪水に見立て洪水を起こして、いわゆる、ダムカレーという講座を考えました。

こちらはその時のポスターですけれども、10 名限定で開催したところ、11 名の参加がございまして、大変好評を得た内容でございます。もともと、地学の世界では、火山活動など色々な現象を、食べ物を使った体験講座として皆様に還元したりするんですけれども、これもその一環で行ったというものでございます。実際に、この純白ゆり根カレーを使っているということも講座内でもＰＲを行いまして、講座が終わったら道の駅に行っ

て買ってもらうという人の流れも生み出しまして、経済効果にも売り上げにも貢献した取組となりました。

また、ゆり根とのコラボですので、私たちだけではなくて、ＪＡ忠類にもご協力をお願いしまして、青年部のゆり根農家の方がリニューアルで新設したゆり根コーナーの解説をしつつ、私が展示室で最新の研究成果をご説明した後に、先程の講座を行ったというものでございます。

次に、同じく郷土展示、地域の特産のＰＲになりますけれども、入庁以来、シーニックカフェの存在も気になっておりまして、当館のすぐ後ろの丘陵にある地域資源ですので、しっかりＰＲしたいと考えていました。そのため、リニューアル時に、当館のエントランスにシーニックカフェの紹介パネルを作りました。パネルを拡大したのがこちらになりますが、エントランスで地図も載せてＰＲをして、当館とシーニックカフェとのお客様の流れを作ったんですけれども、それ以降も何かしらの方法でシーニックカフェをＰＲしたいと思っていたところ、今年帯広駅で、中札内の養護学校の子どもたちが作った日高山脈に住む動物たちのパネルが展示されていることを知りまして、設営日に直接、先生にお話をしまして、当館でも展示をして欲しいとお願いをしました。つまり、シーニックカフェのオープンと全く同じ期間中、記念館で日高山脈の動物のパネル、実は皆さんの後ろにも一部あるんですけれども、これを展示することで、日高山脈に興味を持っている方も含めたＰＲをしようという作戦を行いました。

その結果、中札内の子どもたちが、記念館で展示できるならということで、新しくナウマン象の群れを作ってくれました。研修室に展示しているのはマンモスですけれども、マンモスも制作してくれました。かつ、もともと帯広駅での展示は、十勝総合振興局、日高山脈国定公園に関連する機関が関係していたものですから、振興局にも挨拶に伺って、このような取組を行うことをお伝えしたところ、お客様への配布資料をいただくなどの連携ができまして、特に十勝総合振興局は、今後この国定公園のイベントを実施する際に、うちの記念館を会場にすることを想定してくださるというお話をいただくといった効果も生まれた事業でございます。

次に、地域住民による写真展を開催しております。これは、今まで忠類ナウマン象と言いますか、化石に興味がなかった人にも記念館に来ていただいて、関係人口の拡大も目的としております。地域づくりですので、あくまでプロではなくて、幕別在住もしくは縁のあるアマチュアの方の作品を使って展示をするものでございます。

忠類ナウマン象の時代は、今とそれほど変わらない環境であるということがわかっていますので、現在の十勝の自然を撮影した写真を展示して、それをご覧いただくことで、当時に思いを馳せてもらうというテーマに設定しております。昨年から２年連続で開催し、非常に好評を得ておりまして、実際に一度も当館に来たことがないお客様にもご来館いただく効果が生まれております。

この展示会ですが、地域の方の作品ですので、記念館だけで行うのではなくて、他の会

場でも巡回させることで、相乗効果を進めております。例えば、これは百年記念ホールで行ったんですけれども、このように記念館の展示を町内の施設に持っていくということも行っております。今年の２月まで行ったこの長尾さんの写真展ですが、この方が非常にありがたい取組をしていただきまして、この展示会を記録に残したいということで、販売はしていないんですけれども、自費出版で展示会の写真を小さな写真集にまとめてくれました。こういうことをやってくれたということは、地域に貢献できているなというふうに思っているところでございます。

次の事例としまして、ここからは、教育現場との連携事例をお話します。

これはかぼちゃプロジェクトですね。先週、委員の皆様は札幌市の円山動物園に行かれたと思いますが、円山動物園のゾウ糞製堆肥を使って、忠類小学校の農園でかぼちゃを育てて、秋にプレゼントするという SDGｓも含めた事業です。

これは、2019 年の発見 50 周年を機にスタートしていますが、今年度からＪＡ忠類も本格的に協力しまして、苗づくりから畑の整地まで手伝ってくださるようになりまして、順調に育っているプロジェクトでございます。

このプロジェクトは、円山動物園が会場の１つということもあって、大都市圏で展開していることから、全く予想していなかったうれしい効果がいくつもあります。例えば、札幌の絵本作家さんが、円山動物園に行った時に、このプロジェクトの紹介パネルを見て、これはすばらしい取組だということで、絵本にも忠類小学校を登場させてくれました。

もう１つは、円山動物園がミュージアムショップを運営している株式会社アクアが、プロジェクトの取組を知って、ぜひそれをテーマにしたぬいぐるみを作らせて欲しいという提案をしてくださいました。作成にあたっては、忠類小学校と中学校共同で約２年かけてナウマン象のぬいぐるみを作ったんですけれども、最初に 600 個作ったものが、来月でまもなく完売予定というところになります。道の駅忠類店長が追加発注をしてくださり、そして、ふるさと納税の返礼品にも採用されました。

順調に売れて、このぬいぐるみ自体が売れるのももちろん嬉しいんですけれども、ぬいぐるみが売れる重要なところは、この下げ札にこそ意義があると考えております。これは、ぬいぐるみに必ずついてくる下げ札ですけれども、忠類ナウマン象の紹介とかぼちゃプロジェクトのことを８ページに概要をわかりやすくまとめたものでございます。購入者は、必ずこれを見ることになりますので、本町の事業を全国で買ってくださった方が知り、広げることができますので、ぬいぐるみが売れる本当の意義というのはここにあるというふうに思っております。

今、九州の博物館でもこちらを取り扱ってくれようとしていますし、長野の博物館もと取り扱っています。また、大阪の博物館も取り扱いを検討してくれています。長野県の野尻湖ナウマンゾウ博物館では、いきなり 40 個買い取ってくれたりするなど、順調にこのナウマン象のぬいぐるみが広がっています。

実は今、東京の上野にある国立科学博物館で「氷河期展～人類が見た４万年前の世界～」

というイベントが開催されていますが、これはナウマン象とマンモスの時代がテーマの展示となっています。前半は海外の収蔵資料がメインとなっていて、後半に日本のこの時代の資料が並ぶんですけれども、日本の展示コーナーのメインが忠類ナウマン象になります。忠類ナウマン象は、クウェートを除きますと全国22ヶ所に兄弟たちが展示されていますが、博物館の特別展に展示されているのは、第25標本、栃木県が持っている標本になります。

このぬいぐるみができた後に、忠類ナウマン象の教材を展示している全国の博物館にぬいぐるみをＰＲしたんですね。忠類ナウマン象がモデルになっているぬいぐるみですので売店で取り扱っていただきたいとお願いしたところ、栃木県の学芸員、知り合いの学芸員がですね、氷河期展に自分のところの忠類ナウマン象を出展するということで、スポンサーとなっているテレビ局にぬいぐるみのことを紹介してくれました。そうすると、そのスポンサーからお電話が来まして、ぜひ、売店で取り扱いを希望されました。ただ、在庫が少なかったこともありまして、道の駅店長が尽力してくださり、まずは20個、ここの特別展の売店に提供しましたところ、1日で20個完売してしまいました。要するに、この特別展における主要な土産品になることがわかりました。

この特別展は10月まで開催しておりますので、新しいぬいぐるみが入荷次第送るんですけれども、この特別展は福岡と富山、名古屋と巡回することから、恐らく各会場でも、このぬいぐるみは取り扱ってくれることになりますので、ぬいぐるみを購入したお客様は、本町の取組を、下げ札を通して知ってくれるという効果が生まれているところでございます。

次に忠類中学校との連携事例になります。

中学校は、本当に主体的に忠類ナウマン象の発掘、それから展示を総合的な学習の時間に組み込んでくれております。具体的には、まず、当館に子供たちが来て私の解説、いわゆる座学をします。その後、発掘現場に行って、発掘体験とナウマンゾウが見つかっている現場から小石を採集します。それを当館に来てモザイクアートパネルを作るという３回セットで取り組んでくれております。

また、総合的な学習時間でゆり根のことも学んでいますけれども、郷土展示室に新設しましたゆり根コーナーを活用して、校外事業としてＪＡ忠類青年部の方をお呼びして、子どもたちに講義をしてくれています。

この校外授業は、ゆり根コーナーを作る前は、実際に畑に行って実施していたものですから、天候に左右されたり、暑さにより児童の負担が大きかったのですが、ここにコーナーができたことで、中学校としてもとても助かっているということで、本当にこの郷土展示コーナーを作って、学校と連携することができて良かったなと思っております。

次に、学校連携、教育現場との連携ということですれども、大学は私も十勝に来て、連携先の１つとしては、帯広畜産大学は外せないだろうと思っております。

何かしら連携したいと思っていたところ、記念館のリニューアル前から、本州で見つか

ったヒグマの化石のレプリカを展示しておりまして、要するに、実はナウマン象の時代にはもうヒグマが生息していたことが分かっておりますが、具体的にそれを展示物でＰＲしている博物館というのは実は少なく、北海道ではないです。

ですので、せっかく展示物がありますので、しっかりＰＲしようと思いまして、ＰＲにあたっては、比較検討用の標本として現生のヒグマの骨が必要になるんですけれども、幸い忠類地区で駆除されたヒグマを提供いただけることになりましたので、それを使ってその骨格標本を作る、もしくは、複数の骨を収蔵することで、将来ヒグマの化石が出たときに、必要となるものを揃えようとしております。

私自身が１人で標本化しても良かったんですけれども、せっかくなので、大学院生にとっての社会教育への活用という位置付けにしてもらおうと思って、課題としておりました帯広畜産大学との連携に活用した事例でございます。大学も地域貢献できるならば、ぜひということで、子どもたちと大学生が一緒になって骨格標本を作りまして、ナウマン象の前に置いて、実はナウマンゾウとヒグマが一緒に生きていたということを初めて効果的にＰＲしているのが当館でございます。

この帯広畜産大学との連携もとても良い効果がありまして、１つは、当館で初めて、帯広畜産大学から博物館実習生がこういう取組をしていることを知って来てくれました。

それから、帯広畜産大学には、数年前に帯広動物園で亡くなったアジア象のナナちゃんの骨がございました。これは、死んだ後の病理解剖のために大学に運ばれて、解剖後、骨になっていて、動物園も展示の予定がないということで行き場もなく大学に眠っていた資料でしたが、それを全て当館で管理できることになりました。所蔵者は帯広動物園のままですけれども、当館で活用していいということになりました。ですので、１頭分のアジア象の骨が収蔵されております。

現在、具体的に展示しているのは頭の骨ですけれども、ナウマン象記念館にとって、象の骨格が１つ、一体分あるというのは、非常に展示にも使えますし、私にとっても、将来化石が見つかった時に、比較標本として大変重要な意義を持つことになりまして、これも、地域連携としてはうまくいったかなと考えております。

ここからサミットの説明になりますけれども、開催要項を３ページにわたって紹介します。

町長からナウマンゾウサミットの概要説明がありましたけれども、10 月 18 日に第２回目の全国ナウマンゾウサミットを幕別町で開催できることになりました。このサミットは、学術的なものではなく、ゾウ化石で地域づくりを行っている自治体が集まって、どんなことをやっているかということを共有することで、お互いにそれを還元して活性化していきましょうというのが主目的となっております。

今のところ、私たちの町と東京都中央区、長野県信濃町と滋賀県多賀町の４つがメンバーになっておりまして、第１回は、ゾウ化石について、どのような活用ができるかということを話し合って、盛り上がったところでございます。

幕別町で開催するにあたって、この４つの町以外にも、仲間はどんどん増やしていこうという方針で、幕別町では北広島市をゲストにお招きする予定としております。北広島市を招待する理由としましては、幕別町と北広島市だけが、日本でナウマンゾウとケナガマンモスの化石が両方見つかっている町になりまして、ここの学芸員もとても面白い新規事業やっていますので、それを発表してもらおうということでございます。

会場はまさに本会場にて開催いたしますが、椅子だけ並べて最大 70 名。参加無料でオンライン配信もしますので、全国の方も参加できます。

こちらは当日のタイムスケジュールですけれども、幕別大会を開催するにあたってのテーマとして、「地域づくりの新しい未来ゾウを探る」ということに設定させていただきました。先ほど申し上げましたとおりですけれども、普段の取組をお互いが共有して知ることで、発展させましょうという内容でございます。

まず、各首長様からテーマに沿ったまちの紹介をしていただいた後に、各自治体の代表者が発表するという内容でございます。このサミットの趣旨としまして、できるだけ活動している地域の方に発表していただこうということになっていますので、幕別町は忠類小学校の校長に、かぼちゃプロジェクトのことを発表していただく予定でございます。

各代表の発表が終わった後に休憩を挟みまして、この後説明しますけれども、幕別清陵高校と行っているＬＩＮＥスタンプづくりのお披露目、表彰を行いたいと思っております。その後、首長様を含めました自由討論を行った後、最後に、来年度は長野県信濃町の開催が決まっておりますので、町長にご挨拶をいただいて終えるというプログラムとなっております。

サミット自体は 18 日の午後だけですけれども、このサミットも地域づくりの重要な要素になりますので、関連事業も色々企画しております。

１つは、これは実は町長のご提案でございますけれども、発掘体験、いわゆる大衆発掘を行いたいと思っております。これはナウマンゾウサミットに向けてのプレイベントとして、３日間、一般の方と一緒に発掘をしたいと思っております。

道の駅忠類とホテルアルコを経営している株式会社アンビックスさんの協賛で、記念館のエントランスにカフェを設置したいと思っております。また、道の駅忠類には、このサミットで参加する自治体の特産品の販売コーナーを設置する予定でございます。このナウマンゾウカフェのところに、北広島市から実物大のナウマンゾウの頭部の模型を借りて設置することで、会場の雰囲気を演出したいと考えております。

このナウマンゾウサミットは、翌日にどんとこいむら祭りが開催されるため、それと連日開催することで、観光ＰＲの相乗効果を狙っていますが、祭りの開催に当たって当館の入館料が無料になりますので、できるだけ子どもたちにもサミットに絡めて楽しんでもらおうということで、足寄動物化石博物館に出張していただいて、参加には料金が必要ですが、この会場で化石発掘体験をしてもらおうと思っております。また、10 月の１か月間は、十勝の自然史研究会による十勝の「ジオサイト」写真展というのも開催して、地域

全体でサミットを盛り上げていきたいと考えております。

このサミットは、地域づくりの１つとして位置付けていますが、やはりサミットですので、普段の地域づくりをさらに発展させたいというのがございます。

その取組の１つとしまして、幕別清陵高校と一緒に忠類ナウマン象をモデルにしたＬＩＮＥスタンプ作りを行っています。これは、町内にある唯一の高校ですので、地理的には離れておりますが、忠類ナウマン象のことで子どもたちとも何かやりたいということがありましたので、このサミットを機にこういうことをやっております。

このＬＩＮＥスタンプ作成の概要につきましては、子どもたちにまず原画を書いていただくんですけれども、これはもちろん、私が授業をして忠類ナウマン象の特徴を伝えております。それで、子どもたちがたくさん書いてくれた中から、大賞を選んで、その絵から８パターンのＬＩＮＥスタンプを作るというものでして、おはようとかおやすみといったセリフに合わせて、プロのイラストレーターが原画をリライトを施して完成させる形式です。

この原画は、夏休み明け８月中旬に回収しまして、９月に完成させてＬＩＮＥ運営会社に登録し、10 月にお披露目という流れですけども、セリフは先に集めまして、子供たちにとにかくたくさん書いてもらいました。一般的な挨拶もありますが、北海道方言を取り入れたセリフも考案されていますので、こういったものを活用して、しっかり、ＬＩＮＥスタンプの形で忠類ナウマン象をＰＲしたいと思っております。まずはサミットという媒体を通して全国に広まることになりますので、これも有効な地域づくりといいますか、本町のＰＲになると思っております。

事例の最後になりますけれども、このサミットの取組の中で、もう１つ、ナウマン太鼓を重要な要素の１つにしております。これも、私は入庁してから、演奏が途絶えているのがずっと気になっていまして、何とかこのサミットで復活できないかということで、色々お願いをしました。そうしましたら、実現の見通しが立っております。守屋給食センター長らが指導に名乗り出てくれまして、保存会の長谷川さんという方がリーダーで行っています。

ちょうどこの間水曜日に練習が行われまして、毎週水曜日。ナウマンゾウサミットの翌日のどんとこい村祭りのオープニングイベントでお披露目することを目標に練習が進んでいるところでございます。

こちらは小中学校に募集をかけた時のチラシですけれども、初日は７名の子どもたちが集まってくれまして、保護者の方々も一緒になって練習してくださいました。子どもたちも楽しそうにやっていましたけれども、保護者の方や先生方も本当に楽しそうに一体となって練習してくれているのを見まして、地域の郷土芸能の可能性を、練習の様子を通じて改めて実感したところでして、お披露目が楽しみなところでございます。

最後に、今後の課題に触れたいと思います。

発掘調査が可能であることは、幕別町の最大の強みでありますので、これは何とか継続

をしていきつつ、この後展示室でご説明しますけれども、見つかってない部位がたくさんございますので、それを見つけて、収蔵資料の充実を図り、地域資源として活用していきたいと考えております。

それから、名称を「ナウマン象記念館」から「ナウマンゾウミュージアム」へ変更できればと考えております。これは、２つ意味がありまして、１つは、今までは、実物化石が１つもなく、学芸員もいない博物館でしたので、発掘のことを記念した展示内容という意味で、記念館という名称が適していたと思いますが、学芸員も入り、実物化石も増えまして、新しい化石も見つかっていく中では、ミュージアムという名称がより適していると考えております。

これは、私が以前いた北海道博物館もかつては開拓記念館でしたが、開拓記念館と聞いて博物館をイメージするお客さんが実は少ないということがわかって、北海道博物館に名前を変えました。記念館という名称では、化石展示のイメージが伝わりにくい場合があるため、そういう意味でも名前を変えることで、観光などのＰＲにも繋がると思っております。

もう１つ、うちの博物館は、忠類ナウマン象の象が漢字で表記されていますけれども、私の知る限り、全国で論文も含めましてナウマンゾウの象を漢字で表記しているのは、恐らくうちの町だけだと思います。ですので、ナウマンゾウサミットでは片仮名表記を採用していますが、表記の統一という意味でも、将来、ナウマンゾウミュージアムに変えることができればなというふうに思っております。

３つ目は、人材育成を念頭に置いた事業の継続というのは、今日発表した内容を維持しつつ、さらに発展させていかなければというところでございます。それから、４年後に発見 60 周年を迎えますので、その時までの目標ということで、中期的な目標を設定しています。

１つは、円山動物園と行っているかぼちゃプロジェクト、あのかぼちゃを商品化し、ブランド化まで進められればと考えております。これは、担当者レベルですが、ＪＡ忠類さんと進めておりまして、先日、ＪＡ忠類青年部の皆様と円山動物園を視察いたしました。

最後に、大都市と地域をつなぐ事業の企画というのは、今で言うかぼちゃプロジェクトですけれども、札幌のような大都市で、うちの事業を展開すると様々なＰＲ効果が生まれるということがございましたので、こういったことも、新たに何かできればなと思っております。具体的にはないですが、例えば、ナウマンゾウサミットで、東京都中央区浜町と繋がっております。日本橋浜町の商店街の連合会長が、今回ナウマンゾウサミットで発表されるんですけども、そうした地域と強い連携を築く事業を展開できれば、日本橋浜町というところで、うちのナウマンゾウを使って、地域のこと、幕別町のことをＰＲできるのではないかと思っていて、これを中期的な目標として、今後取り組んでいきたいと考えております。

説明は以上になります。ありがとうございます。

（町長）
　ただ今の説明内容に関しまして、委員の皆さんからご質問などあればお願いします。

（東委員）
　色々とナウマンゾウに関わる商品など販売されていることは、今、教えていただいて勉強になりましたし、実際、道の駅にも寄らせていただいて、どういった商品が販売されているかは把握しております。
　先程、館内を少し見させていただいて、私が気付いていないだけかもしれませんが、例えば、先にここの記念館に寄って、ナウマンゾウに感動された来館者が、ナウマンゾウに関するお土産とかグッズはどこで購入できるのかと疑問に思われた際に、館内にここに行ったらグッズがありますよといったお知らせやポスターが、館内のどこに掲示されているのか気になりました。道の駅から来られた方はわかりますが、まず記念館を見て、いざ、お土産をとなった時に、道の駅に行かなきゃと気付けるきっかけになるような館内でのＰＲについて教えていただきたいなと思います。

（町長）
　サミットの周知と道の駅への誘導ですね。

（忠類ナウマン象記念館長）
　実は展示室には各所にそういったことが書かれているものがございます。
　ただ、小さな表示に留まっているため、今後はもっと大きいサイズにしたいと思います。ぬいぐるみに関しては、実は骨格標本の下に10個ほど並べて道の駅で売っていますと表示して置いていましたが、完売間近のため、記念館で見た商品が道の駅で購入できない状況は望ましくないと判断しまして、一旦、撤去しているところでございます。
　サミットの周知については、近日中に開催要項が完成する予定ですので、完成後はポスター、チラシの配布はもちろんですけれども、ホームページやSNSなども活用しながら、積極的にＰＲしてまいりたいと考えています。

（町長）
　よろしいでしょうか。他にございませんか。
（國安委員）
　３点ほど教えてください。
　サミットですが、オンライン発信というのはどういう形でしょうか。

（忠類ナウマン象記念館長）

オンライン配信の仕組みですが、第１回大会と同様に会場に来られない方で、ナウマンゾウの地域づくりをしている方々にも、積極的に参加いただけるように、参加希望者のメールアドレスにZoomの接続情報を送付して、当日ライブ配信を視聴いただける仕組みです。

第１回大会では30名ぐらい、オンラインで参加された方がいたと伺っていますが、幕別町での開催には、より多くの方々にご参加いただきたいと考えております。

（國安委員）

ライブ配信ということですね。わかりました。

あと、グッズのことですが、ぬいぐるみがすごく人気で素晴らしいなと思っていますが、このサミットだけの限定ぬいぐるみとか、限定うちわとか限定バッジといったものは考えていますでしょうか。

（忠類ナウマン象記念館長）

幸いですね、ぬいぐるみの小さいキーホルダーバージョンの開発が進んでいまして、そちらは株式会社アクアともサミットに間に合うようにしますと仰っています。

あと、サミット限定というわけではないですが、先程発表しましたけれども、各自治体の特産品をサミット翌日のどんとこいむら祭りの２日間、道の駅忠類に特設ブースを設置しまして、販売したいと考えています。

（國安委員）

はい。ぬいぐるみの大きめサイズを50個ほど用意すれば良いのではと思うんですよね。もっと高い値段で売っても多分売れるんじゃないかなと。

（忠類ナウマン象記念館長）

確かにそうですね。株式会社アクアにお伝えします。

（國安委員）

ありがとうございます。あと、ゆり根のことで、先程展示見ましたが、私もあまり知らなかったんですが、すごく美容と健康に良いんですね。こういう会議で話す時に緊張するんですけどって言ったら、ゆり根食べたら精神が落ち着つかせる効果があるなど貴重な食べ物らしいんですね。

私はそんなことって知らなかったですし、皆さんはご存じかもしれませんけど、そういうことが展示されていると、そうなんだということになると思いますので、忠類はゆり根があるんだよと言って、ゆり根って食べられるんだくらいのレベルの人から、これはもう漢方薬にも匹敵するぐらい素晴らしい食べ物ぐらいのアピールをしても良いのではない

かなと個人的に感じました。検索すると多くの情報が得られますので、ぜひご参照ください。

（忠類ナウマン象記念館長）
　ぜひやってみたいと思います。

（岩谷委員）
　２点。まず、今年はナウマンゾウサミットがありますので、恐らく本格的な発掘調査は、一旦お休みになるかなと思いますが、また来年以降、発掘はどんどん進めていきたいというお考えでよろしいでしょうか。

（忠類ナウマン象記念館長）
　そうですね。おっしゃる通り、例年のような長い期間はできないですけれども、３日間と半日程度の実施を予定しております。その発掘の様子をそのまま残しておいて、サミットの関係者だけですけれども、現場に呼んで、今年の発掘成果をご説明したいと考えています。

（岩谷委員）
　頭骨そのものと言いますか、もうちょっと破片は広がっていると思いますが、どうお考えでしょうか。

（忠類ナウマン象記念館長）
　今年はもし見つからなかったら、道路の下の可能性はあるかなと。

（岩谷委員）
　最終的にはそこに行かなきゃならないんだろうなとは思っています。
　あともう１点、ナウマン太鼓ですが、私もこのナウマン太鼓が段々廃れてきたなと思っていまして、これが復活できるというのは、どんなに忠類の人にとってはうれしいだろうなというふうに思います。ぜひ、復活させていただきたいんですけど、初日、７名のお子さんが来ていただいたということで、最終的にどのぐらいの人数を集められれば、ステージに立てるのかなと。

（忠類ナウマン象記念館長）
　長谷川さんや守屋さんに教えていただいたんですけども、５名いればナウマン太鼓は演奏できます。今７名いて、保護者の方４名いますので、最終的には、この前初日に話していたのは、保護者の方も含めてステージに立っていただいて、前列と後列で演奏を変え

ていくようなことができればと。今後、練習の様子が報道される予定ですので、それを見てやりたいという子どもたちが増えてくるのではないかと思います。
　あとは、制服をどう揃えるかというのが嬉しい悩みですね。

（岩谷委員）
　ありがとうございました。楽しみにしています。

（小尾委員）
　この間、札幌の円山動物園のゾウ舎に視察に行きまして、説明も受けてきたわけですけれども、今日は、地域づくりの現状と課題というテーマは聞いていましたが、実際に、今日の資料と館長の説明を伺っていると、結構、地域の方と館長を中心として、地域の方の熱意というのが結構感じられるものがありましたし、皆さんの質問でも笑顔も出てくる内容で、本当に皆さん思いのままに取り組まれていることが素晴らしいことだと思いますし、館長を筆頭にして思うように取り組んでいただければと思っております。
　ここにありますように、ナウマン象記念館からナウマンゾウミュージアムへこの時期とかに関しても館長がここだと言うときが発表のタイミングとして適しているのではないかと考えております。

（町長）
　発見 50 周年を機に再発掘やろうとなったのは、もう半世紀たって忘れ去られている、忠類に住んでいる人すら記憶が薄れているということがあったので、再発掘してそこで何か出てくれば尚更良いなという時に、２年後に添田館長に来てもらって、事業はどんどん拡大して、住民を巻き込んだようなイベントも開催されるようになったということで、非常にありがたい方向に向かっていると思います。
　ナウマンゾウミュージアムについては、先程、説明を聞いて計算してみたんですね。そしたら、第１回ナウマンゾウサミットが 2025 年、第２回も 2025 年ですね。その後、2026 年が長野県信濃町、2027 年が滋賀県多賀町、2028 年が中央区、2029 年が幕別町となると、ちょうど 60 年なので、そこら辺りの節目で。何か大義名分がいるので、本当は 50 年辺りでできれば良かったですが、それはできなかったので、幕別町開催で 60 周年というのは良いタイミングかなと勝手に思いました。
　あとどうですか。よろしいですか。質問は尽きないのかもしれませんけれども、この辺りで締めさせていただきたいと思います。

　事務局から連絡事項があればお願いします。
（事務局）
　次回の会議につきまして、日程及び協議事項等内容は、未定ですが、決まり次第、ご案

内させていただきますのでご出席いただきたく、よろしくお願いいたします。
　事務局からは以上です。

（町長）
　皆さんから何かありませんか。
　それでは以上をもちまして、令和７年度第１回幕別町総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。